

教育課程実践モデル事業で、国語科の森本教諭は、協同学習に取り組み、生徒の論理的思考力の育成、自ら発見した課題を粘り強く考え、多様な他者との関わり合い、協力して解決する力の育成を図ってこられました。

そして、さらなる授業改善のため、2月14日（水）に福岡で開催された「平成29年度次世代教育推進総括セミナー」（西部地区）に参加されました。

そこでは、まず各県の取り組みが報告されたようです。広島県の取り組みとして、「子どもの思考を予想し、自ら学べる授業に構築していくことが必要。複数の教師で学びを捉え、話し合い、次につなげることが重要」と報告された可部高校の取り組みでは、「教科間のつながりをもたせ、年間計画を作成する」、「子どもの実態を考え、育成したい資質・能力を学校で定める」ことなどが重要との報告あったそうです。徳島県の高校の取り組みでは、中学校との相互授業参観＋研究授業を繰り返すなか、最初は生徒の背後から見学していた教員も、生徒の変容が大事であるとの気づきから、授業の見方が変わっていったそうです。福岡県の取り組みでは、「一人の百歩より、百人の一步」を合言葉に取り組み、評価においては、「全ての教師が共通した評価の観点を持つことができた」が、「全ての教育活動に同一の観点で評価することが今後の課題である」と報告されたそうです。

今回は、「実践を通してアクティブラーニングを考える」と題して長野県の谷内祐樹先生が発表されたことの要点と、京都大学の石井英真先生の講義の要点を主にお伝えします。

【発表：長野県 谷内祐樹先生】

○子どもが学んだ手応えをどう自覚するか

- ・形式的な取り組みではなく、子供達が学んだ手応えを感じることを重視する

例) 自分の書いた詩を見て「書いて良かったなあ」と友人に伝えることができる振り返り

- ・子どもが、変わった自分・変わった理由の自覚ができるために・・・

例) 「私たちに」ではなく、「私に」語りかけるものはなに？ ” 問いかけの後、間を取る”

例) 技能の高まりがある時に、教師が見て、支える

○ひとりの授業改善からみんなの授業改善へ

教員個人の点として、ではなく、学校全体、面としての取り組み

【講義：京都大学 石井英真 先生】

高校の改革は、面で、つまりチームで全員で取り組むことが必要である。「この学校の先生は信頼できる」というように、面（学校全体）で信頼できるようにしていく。そのためにも、授業作りで先生方が学び合い、つながりあっていくためのビジョンの共有が必要である。

○学習指導要領の言葉に惑わされず、ビジョンの共有化しよう

(1)子ども像の共有

- ・手法を揃えることには反抗的になる先生が多いが、子どもの話題になるとみんな話すので、まずは子どもの現状について話し、子どもたちの力をつけるために、どうすればよいかを話し合うとよい。
- ・アクティブラーニングに任せるのが怖い、任せた先にどんな姿を目指すのかが見えにくい。
- ・小学校でも同じで、学びの姿が見えにくいので、それを共通理解することが大事。

(2)教師の学びと生徒の学びは相似構造

- ・校内研修の先生方の様子で、生徒の様子もわかる。
- ・子どもの学びを問い直そうとするなら、教師の授業研究のやり方を変え、子どもたちにやらせたことを先生がまずやってみる。

1 テーマがある。

2 見たものを確かめながらの事後検討会をする。

例) 授業をした教室は板書等が残っているので、そこで検討会をするだけでも違う。

3 思考を可視化するツールがある（模造紙など）。

- ・子どもの学びとしてあげられていることは、教員にも当てはまる。
- ・今子どもに求められることは、実際に大人が社会でやっている学びに近い。
- ・授業の腕の向上→技の学びは、実際にやらないと学べない。それは子どもと同じ。
やってみる、やったことから学び、次につなげる。

・先生の足元、部活動での顧問の指導の仕方などにヒントがある。

○「見方、考え方を意識した授業」

・「見方、考え方」はスキルではない、手法でもない。

・「見方、考え方」とは？・・・内容を全て忘れても、残っているもの。

例) 歴史の年号などを忘れても、残るもの。

→結果として教科の本質となるもの、その人そのものになるもの。

○資質能力&社会に開かれた教育課程

・コンピテンシーとは・・・企業の採用側が意識すること。社会で求められる実力。

知識を多く知っているだけではだめ。学力が高くてもだめ。

・「社会でよりよく生きていくための力」と「学力」との間を埋めること→社会に開かれた教育課程。

・これまでの「学力」は、学校だけで通用する学力ではなかったか？社会で役立つか？他人事の知の習得になっていなかったか？

例) 三権（司法立法行政）を概念として学ぶだけ→ニュースを見ているとき、選挙を、三権分立を意識して見ている子がどこまでいたか？

ただ物知りになるだけの知識でなく、それを知ること、社会を観る目、関わり方が変わってくるのが大事。ものを見るときメガネを持つこと、これが、教科を学ぶことの意義である。

例) 理科の酸化も異なる二つのものをつなげること、というものの見方を学んだことになる。

☆学校の教科は、社会で使える、世の中を深く認識するためのメガネである！

・教科内容と教材の研究が必要（教科書を教えるのではなく、教科書で教える）。

○「課題の発見」の解釈を間違えてはならない

「学習付度学習」ではダメ。

例) 「この時間は何しようか？」

→子どもが教師の思いをくみ取って決めるので単元の計画を子どもに投げかけるのは危険。

課題に対し、子どもが前のめりになり、自分のこととして考えられる問い、ということが大事。

○教材との合わせ方

目の前の子どもに必要な協同とはなにか、を考える

そもそも、日本の授業はクラスで行う協同的なもの。しかし最近の授業ではそれは成り立たない。

理由・・・強い学級集団が作れなくなった。クラス全体というよりも仲間内でゆるい感じの話し方が話しやすいなど極小化・ソフト化していつているので、グループ単位で、カフェ的に学ぶ感覚のほうが、今の子供は学びやすい。大人もそうである。

○汎用的スキルについて・・・思考スキルやツールを教えたからといって、うまく考えられたり、思考力がついたりするわけではない。

・深く思考する経験を積むことしかない→深く思考する必然性のある授業→そのために、授業研究をしっかりとる（授業作りの不易の部分）。

・ALは、手段であって目的ではない。手法にとらわれてはダメ。

○教科本来の魅力を広げて考える

・メガネ（これを学ぶことで物事がこのように見えてくる）としての魅力。

・プロセスの面白さ（学問的な面白さ、科学するプロセスを経験させてきたか？）

例) 社会科の先生は歴史的に考えるが、授業では結果だけを聞かせている。歴史の流れを考察する、一番美味しい部分は教師が予習で行っている。それをなぜ生徒と共有しないのか。

正解のない課題に対する納得解、最適解を出す こと。

森本教諭は、復命書で次のように感想を述べておられます。

「他県も試行錯誤を繰り返しながら実践を行っておられた。その中で、各県の共通の気づきとして次の3つが挙げられるように感じた。1. 子どもの視点に立ち、子供を主人公にした学びにすること、2. 身近な先生にヒントを得ること、3. 教師が子どもを見る視点を多面的にすること。また、各県とも、今後の課題として、各教科、またはすべての教育活動に共通する評価規準の作成や、浸透があった。これらは、本校のモデル事業とほとんど共通していることであつた。」

本年度の取り組みや、次年度への方向性が大きくは間違っていないことに意を強したところです。